911.56
I76
5

911.56-I76-5ウ
1200500756647

始

26. 3. 13

911.56
I.76
5

詩集

呼子と口笛

石川啄木

高須書房

1916
100

目次

呼子と口笛
はてしなき議論の後……三
ココアのひと匙……六
書齋の午後……七
激論……八
墓碑銘……一一
古びたる鞄をあけて……一六
家……一七

飛行機……二一

黄草集

江畔雑詩……二五
さみだれ……二八
啄木鳥に……三六
野の花……三八
蹄のあと……四〇
燕……四四
海邊の春の夜……四六
丙午三十九年……四九

野ばら……四九
うたた寝……五〇
木犀……五三
澁民村小吟……五五
春月……五五
友藻外に……五七
山杜鵑……五八
雪の夜……六〇
ハコダテの歌……六一
水無月……六三
年老いし彼は商人……六六
辻……七〇

蟹に……七六
馬車の中……七七
戀……八〇
流木……八二
黒き箱……八五
老人……八七
白骨……九〇
ノートより……九四
一塊の土……九四
山頂……九五
森の中……一〇〇
冬の夜……一〇二

幽思……一〇四
心の姿の研究……一〇六
夏の街の恐怖……一〇六
起きるな……一〇九
事ありげな春の夕暮……一一〇
柳の葉……一一一
拳……一一四
心の姿の研究（補遺）……一一六
無題……一一六
騎馬巡査……一一八
無題……一二〇

無題……二五

—目次終—

呼子と口笛

—附黄草集—

はてしなき議論の後

われらの且つ讀み、且つ議論を闘はすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前の露西亞の青年に劣らず。
われらは何を爲すべきかを議論す。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NAROD!' と叫び出づるものなし、
われらはわれらの求むるものの何なるかを知る、

また、民衆の求むるものの何なるかを知る、
しかして、我等の何を爲すべきかを知る。
實に五十年前の露西亞の青年よりも多く知れり。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

此處にあつまれるものは皆青年なり、
常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。
われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂に勝つべきを
知る。
見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。

されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

ああ、蠟燭はすでに三度も取りかへられ、
飲料(のみもの)の茶碗には小さき羽蟲の死骸浮び、
若き婦人の熱心に變りはなけれど、
その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。
されど、なほ、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

ココアのひと匙

われは知る、テロリストの
かなしき心を——
言葉とおこなひとを分ちがたき
ただひとつの心を、
奪はれたる言葉のかはりに
おこなひをもて語らんとする心を、
われとわがからだを敵に擲げつくる心を——
しかして、そは眞面目にして熱心なる人の常に

有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の
冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌觸りに、
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

書齋の午後

われはこの國の女を好まず。

讀みさしの舶來の本の
手ざはりあらき紙の上に、
あやまちて零したる葡萄酒の
なかなかに浸みてゆかぬかなしみ。

われはこの國の女を好まず。

激論

われはかの夜の激論を忘るること能はず、

新らしき社會に於ける權力の處置に就きて、
はしなくも、同志の一人なる若き經濟學者Nと
我との間に惹き起されたる激論を、
かの五時間に亙れる激論を。

『君の言ふ所は徹頭徹尾煽動家の言なり。』
かれは遂にかく言ひ放ちき。
その聲はさながら咆ゆるごとくなりき。
若しその間に卓子(テーブル)のなかりせば、
かれの手は恐らくわが頭を擊ちたるならむ。
われはその淺黑き、大いなる顏の

男らしき怒りに漲れるを見たり。

五月の夜はすでに一時なりき。

或る一人の立ちて窓を明けたるとき、

Nとわれとの間なる蠟燭の火は幾度か搖れたり。

病みあがりの、しかして快く熱したるわが頰に、

雨をふくめる夜風の爽かなりしかな。

さてわれは、また、かの夜の、

われらの會合に常にただ一人の婦人なる

Kのしなやかなる手の指環を忘るること能はず。

ほつれ毛をかき上ぐるとき、

また、蠟燭の心を截るとき、

そは幾度かわが眼の前に光りたり。

しかして、そは實にNの贈れる約婚(やくこん)のしるしなりき。

されど、かの夜のわれらの議論に於いては、

かの女は初めよりわが味方なりき。

墓碑銘

われは常にかれを尊敬せりき、

しかして今も猶尊敬す——

かの郊外の墓地の栗の木の下に
かれを葬りて、すでにふた月を經たれど。

げに、われらの會合の席に彼を見ずなりてより、
すでにふた月は過ぎ去りたり。
かれは議論家にてはなかりしかど、
なくてかなはぬ一人なりしか。

或る時、彼の語りけるは、
『同志よ、われの無言をとがむることなかれ。
われは議論すること能はず、

されど、我には何時にても起つことを得る準備あり。』
『彼の眼は常に論者の怯懦を叱責す。』
同志の一人はかくかれを評しき。
然り、われもまた度度しかく感じたりき、
しかして、今や再びその眼より正義の叱責をうくることなし。

かれは勞働者——一個の機械職工なりき。
かれは常に熱心に、且つ快活に働き、
暇あれば同志と語り、またよく讀書したり。
かれは煙草も酒も用ゐざりき。

かれの眞摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、
かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。
かれは烈しき熱に冒されて、病の床に横はりつつ、
なほよく死にいたるまで譫語を口にせざりき。

『今日は五月一日なり、われらの日なり。』
これかれのわれに遺したる最後の言葉なり。
その日の朝、われはかれの病を見舞ひ、
その日の夕、かれは遂に永き眠りに入れり。

ああ、かの廣き額と、鐵槌のごとき腕と、
しかして、また、かの生を恐れざりしごとく
死を恐れざりし、常に直視する眼と、
眼つぶれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸は、一個の唯物論者として、
かの栗の木の下に葬られたり。
われら同志の撰びたる墓碑銘は左の如し、
『われらには何時にても起つことを得る準備あり。』

古びたる鞄をあけて

わが友は、古びたる鞄をあけて、
ほの暗き蠟燭の火影の散らぼへる床に、
いろいろの本を取り出だしたり。
そは皆この國にて禁じられたるものなりき。

やがて、わが友は一葉の寫眞を探しあてて、
『これなり』とわが手に置くや、
靜かにまた窓に凭りて口笛を吹き出だしたり。

そは美くしとにもあらぬ若き女の寫眞なりき。

家

今朝も、ふと、目のさめしとき、
わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、
顏洗ふ間もそのことをそこはかとなく思ひしが、
つとめ先より一日の仕事を了へて歸り來て、
夕餉の後の茶を啜り、煙草をのめば、
むらさきの煙の味のなつかしさ、
はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び來る——

はかなくもまたかなしくも。

場所は鐵道に遠からぬ、
心おきなき故郷の村のはづれに選びてむ。
西洋風の木造のさつぱりとしたひと構へ、
高からずとも、さてはまた何の飾りのなくとても
廣き階段とバルコンと明るき書齋……
げにさなり、すわり心地のよき椅子も。

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、
思ひし毎に少しづつ變へし間取りのさまなどを

心のうちに描きつつ、
ランプの笠の眞白きにそれとなく眼をあつむれば
その家に住むたのしさのまざまざ見ゆる心地して
泣く兒に添乳する妻のひと間の隅のあちら向き、
そを幸ひと口もとにはかなき笑みものぼり來る。

さて、その庭は廣くして草の繁るにまかせてむ。
夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に
音立てて降るこころよさ。
またその隅にひともとの大樹(おほぎ)を植ゑて、
白塗の木の腰掛を根に置かむ——

雨降らぬ日は其處に出て、
かの煙濃く、かをりよき埃及煙草ふかしつつ、
四五日おきに送り來る丸善よりの新刊の
本の頁を切りかけて、
食事の知らせあるまでをうつらうつらと過ごすべく、
また、ことごとにつぶらなる眼を見ひらきて聞きほるる
村の子供を集めては、いろいろの話聞かすべく……

はかなくも、またかなしくも、
いつとしもなく若き日にわかれ來りて、
月月のくらしのことに疲れゆく、

都市居住者のいそがしき心に一度浮びては、
はかなくも、またかなしくも、
なつかしくして、何時までも棄つるに惜しきこの思ひ、
そのかずかずの滿たされぬ望みと共に、
はじめより空しきことと知りながら、
なほ、若き日に人知れず戀せしときの眼附して、
妻にも告げず、眞白なるランプの笠を見つめつつ、
ひとりひそかに、熱心に、心のうちに思ひつづくる。

飛行機

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを、
給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたつた二人の家にゐて、
ひとりせつせとリイダアの獨學をする眼の疲れ……
見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

（以上八篇、明治四十四年六月作）

黄草集

江畔雑詩

以下に記しもてゆくは、六月末、帷子小路の僑居より一家を中津川の岸近く林檎苑に添ひたる磧町四番戸に移してよりの作なり。

余はこれより記しゆく作の數を重ぬるに從つて、我が詩風の上に何らかの變化の伴ひゆくべきを信ぜんとす、そは蓋し人の心生涯の起伏はやがてその作物の上に變化高低の斜影を投ずべければ也。嘗て澁民の草廬にあるや余はただ新しきいのちの叫びを歌ひ試むるに急にして、當時の詩界に流るる幾多の逆行もしくは平行する潮流に對しては殆んど無關心なりき。その後に來れる新境遇は、この時代に比して多少の變化あるを見る。

昨秋十月の末、北海蒼古の秋に浴する事三週、或は澎湃たる日本海の波浪に孤嘯し、又親しく競爭激甚なる新開地の人事に接して、胸鼓らべ轉た急なるを覺え、故山にかへりて間もなく、内に抑へがたき自

負と幾多の野心を包み、外に幾多の嘲笑と又意外の歡迎とを以てむかへられ、飄然として都門に入るや、玆に余は當然名を天下に馳する詩人の間に交遊を重ね、少年の客氣發するがままにその新境遇に處して日もこれ足らざるの思ひをなしき。然もこの時代にありては、新事物新刺戟に接する事あまりに繁かりしがために、自ら省みて深き思考を重ぬるの暇なく、一言にして盡せば自ら持するの一念なく、徒らに彼等の渦中に投じて外來の空氣を呼吸するに忙はしかりしの感なき能はず。蓋し斯くの如きは、年齒僅かに十九、永く寒郷に隱れて夜半壁上の我が影を友としたりしものが、にはかに到る處好意と賞讃の聲と敬服とにむかへらるるにいたれる一少年に取りては、又止むを得ざりしものあらむ。然りと雖も、斯くの如き生活は、余の性情として永く堪へうべき所にあらず。かくて半歲有餘の我が大都生活は漸く終りに近づき來れり。ただこの時にありても、稚なき頃より總てにまして自己を信ずること深かりし一念によって、完たく余自ら本色を失ふには至らざりき。

かくて今年の五月、——杜鵑、閑古鳥など、ふるさとを思ふたづきのいと多き五月とはなりぬ。遂に余は、東都の詩人社會に對する抑へがたき厭惡と不滿と、又切實なる人生慘苦の涙とを胸に藏して、とある曉、人知れず都門を脱し、孤雲飄々、みちのくの古巢の空に流れぬ。あはれ、人知れず！當時余のいかによるべなき敗荷一葉の身なりしよ。消えむとして消えもせず、沈まむとして沈みもえせず、飛ばむとして飛びもえせざる冷たきいのちの玉の破片を心に祕めて、かくて今の新しき生活の第一日に、別に心に決したる所もなくして足を踏み入れたり。

あはれ如何に非常なる變化なりしぞや。さきには一人の親緣さへなき客舍の人たりし身が、今はあたたかき愛の新苑に心の限り甘き慰めを呼吸するなり。さきには塵埃を吸ひ煤煙にはばめる日光を浴びしに、今は些のけがれなき新鮮の空氣を吸ひ些の遮りなき天日の影を直ちに浴ぶる也。況んやこの杜陵の地は予が十歲の春より八星霜の間學堂に起臥したりし記念の市なるをや。余が身邊のあらゆる事物皆余が亂れ

病める心に無上の仙藥の如かりき。更に一家をこの中津川の畔にうつしてより、日夕潺湲たる水の音に耳を洗ひ、それとなき夏痩せの病軀を綠かをる樹かげの綠に安らへては、あはれ、久しく塵に染みし我が心、いつしか再び昔の淨けさにかへれるが如く、一月二月を經るまま に、漸く靜かに物思ふをうるに至れり。

さみだれ

一

五月雨闇(くら)き「かなしみ」の
雫しとどに降りそそぐ
泥(ひぢ)の小溝のささ流れ、

水嵩(みかさ)にごりて、毒芹や、
細蘭、小よもぎ、田うごきの
岸の細根に、運命の
小さき淀みや、小渦卷く
淵の濁りに底もなし。

二

うづまきぬ、ああ、降りそそぐ
その「かなしみ」の溢れ水。
(人は黝(かぐろ)き黴の香の
壁をにらみて、壞(く)えてゆく

心をとざす時ならむ。）
天の鏡の灰曇り、
静かに壓すや、薄暗き
溝の腐敗に濁り入る。

三

水の華なる泡沫の
ひと瓣のまろき花びらも、
にごりて饐えし泥の香や。
よもぎの下葉黄にただれ、
みどりの舌の毒芹の

根には小蟻の巣も朽ちぬ。
細蘭のみだれ折れあひて、
田うごき喰みぬ、雨蟲は。

四

七日七夜の直降りに
「不壞」の砦は頽えたり。
物のよろづのいのち、皆、
「腐敗」「荒廢」の世に入りぬ。
地は、かなしみの濕沼の、
世の初めより覺めずして

死にてありける黒土の
よろづの根皆「死」を吸ひぬ。

五

ああ　かきくらす五月雨の
垂れてひらかぬ黒幕の
じめじめしたる息の香に、
「死」の種子こそは萠え出らむ。
はびこる「陰影」に樹樹の葉も
かぐろみわたり、活動の
火のぬくもりも消えはてて、

呆びの夢は漲りぬ。

六

七日夜ながき直降りは
かくてあがりぬ。——入相の
日は血の色の赤赤と、
雨雲きれし西の涯、
いそぐともなく、せくとなく。
靜かに、低く、力なく、
沈みをはりて、黄昏そ
物の不淨に下り立てる。

七

降りかたまけし「かなしみ」の
水嵩あふるる泥の溝、
草の亂れに風もなく
寂寞を呼ぶ斷末魔、
たそがれてゆく運命の
にごり底なき小淀みに
たじろぐ如くかすかなる
光を投げぬ、星二つ。

八

ああ、二つ星、いとほそく
つつましげなる瞬きに、
天に咲くなるほほゑみを
うつす「黄」の花「青」の花、
何の宮居の御燭の
消えぬ色をや染めぬらむ、
「腐敗」「荒廢」の濕沼に
見よ「清淨」を宿したる。

（七月四日）

啄木鳥に

何處よりかたづね來にけむ。十月九日、庭前十歩ともへだてぬ老木の梅の幹に來て、我が見てあるにもおちず、しきりに木を啄く音を流しけるに。

鳥よ、などここには來しや。
めしうどのいぶきにまみれ、
光なき葉萎えの樹樹に
巣くひぬる罪のけらむし、
いかに汝がつよき嘴

ひねもすも啄き暮ちすも
喰みつくすすべあるべしや。
斧いらず、太古の民の
足あとよ、猶新たなる
白雲と落日の山の
八千とせを天のみ射せる
いのちの木、その髓にしも
なが糧はさはにあるらむ。
鳥よ、などここには來しや。
ここはこれ、秋の柱の
つめたきにうちぞ凭りつつ、

仄に照る入相の日の
あたたみに涙は垂るる
さびし兒の愁ひの宿り、——
夢にのみ心の華の
まどかなる匂ひ吸ふなる
罪の鄕。——羨まし、汝、
鳥よ。などここには來しや。

野の花

千萬世のむかし、天の穗の

露ひと雫野におちて
うるほひ泌みし惠まれの、
さは、花種のくはし芽の
花とし咲くや、世々に、また
今もよ咲きぬ。——野はひろく、
空蒼き世に、朽ちぬ日の
常磐心のときめきに。

仄には咲けれ、めぐまれの
野の花、あはれ、ひと花に、
天の祕れの光宮の

花燈に照らふものみなの
心ぞさくと、にほへばや、
咲き、また散りぬ、祝(ほぎ)の日の、
ことぶき、――二日三日乍ら
生の日光(ひかり)のふところに。

（十一月二十一日夜）

蹄のあと

友井口龍城子が新著『蹄のあと』（ゲスターフ傳）に餞するの詩。

雲わかれ、光天(ひかりあめ)に、

生の火の人の胸に、
もえし日を思ほへばや、
あな尊と、この國國、
野に谷に音もこもれ、
ありし日の蹄のあと
花ぞ咲ける。

選(え)られ兒の胸にもえし
火よ、神のさかえなれば、
あはれ、火のつるぎ、草を
なぎ立てし戰の野の

駒光る蹄のあと、
さくは、見よ、花鈴蘭、
香も高けれ。

しろがねの花の鈴や、
かをりこそ美し響き。
鳴るは、世のとこしなへに
熄えぬ光の功績、また、
朽ちぬ世の祝の幸日、
年毎に野邊にかへる
とはの春よ。

げに、この世、また詩の國。
花と火と野邊に匂ひ、
選られ兒の胸に、神の
火の種よ、落ちて、花と
咲きつ、また火とも照れり。
かくて、見よ、花の鈴の
音こそたえね。

ありし日の蹄のあと、
打伏して思ほへばや、
鈴蘭よ、——勝利の猛者が

紅き血にさきし花よ、——
えられ兒の氣負ひし駒
蹄の音、その幸をし
今に傳ふ。

（十二月二日夜）

燕

南の枝につばめは
巣こそくへれ。
若軟草（わかなよぐさ）の青牀（あをどこ）、

戀はるる二人は
新苑花垣ゆひて守る。
ああ、この春風うれしき。

柳しづれて、濡羽の
つばめうたふ。
うたもうれしや、新苑、
けふこそ、二人は
濡れてぞ擁（だ）きぬ、しぬび心。
ああ、この春雨はづかし。

（十二月五日）

海邊の春の夜

えも見ぬ花の島影、
朧月夜
春の淡海のかなた
おぼろのけしきを
見しとて、海士が子、ひとり船を
漕ぎ出し話もおもほゆ。

水平線のほのめき、

月のけはひ。
浪みな匂ふ浦回
少女はうたへり。
網干す櫻の枝に花の
搖曳、雲かとばかりに。

汀に足を洗ひて
波に散らふ
花、片足に斑ら。
かへらぬ海士が子
おもへば、旅の身、わが故郷

今宵の岸こそ忍ばゆ。

（十二月五日）

丙午三十九年

野ばら

水無月ふかきうるほひの
朧ろの淵のみ空より、
祭女の花笠の
ふと後見るなよびかに、
宵月の影野にひくし。

せせらぎ添ひの畔路の
片側薄き雪の色、――
野茨若芽の枝枝に
ともせる百の匂ひの灯、
今、ほのじろく燻るなる。

（一月十八日夜）

うたた寢

すぎてゆく聲あり、――木の間花に
靜かに降る法惠の雨に似たり。

或は、今、ゆめみし丘の公孫樹、
現にぞ光流の鄕を見よと
こがね雲、ちぎれの葉をしふるや。

うたた寢の幻心地、あはれ、
すぎてゆく聲にしさめて、ひとり、
病ごころ、ときめき來けれ。げにや
葉はおちし林檎の苑のかなた、
中津川きよき水瀨の石に
うたふすずしき聲音、――うれし、
顫音のここにぞかよひ來なる。

川の音、――と思ひ、とぢし眼には、
うかび來ぬ、常磐の海の姿、
廣廣と涯さへ知れぬ蒼み。――
ここにして萬の川を合せ、
ここにして萬の舟のいのち
浮きぬ、また、沈めるありと、見れば、
さながらにわが行く夢の院家。
今遠く夢の大波寄する
ひびきとしきくは、――川音、あはれ
すぎてゆく聲なり。かくて

我はまた深く眠りぬ。

（一月二十日）

木犀

羽白き鳳に
うちのりて、紫の
晶玉の門ちかく
とび來ぬと、目ざむれば、
おばしまにただひとり、
わが醉はさめはてぬ。

庭ひろき宵暗に
木犀のかをりのみ
いと高く流れたり。

（一月二十日）

澁民村小吟

丙午王春三月四日一家を携へて故山澁民村の住人となりぬ。永く生活の苦闘と沈鬱なる不健康に沈湎したるの身、今なつかしくも追懐多きふる里に隠れて、静かに心の枝に立ちかへる春を樂まむとする也。

春月

春月や、高士(かうし)臥すなる大林の
若芽する小夜のかをりにあくがれて、
水咽ぶ岨路(そはぢ)を小鹿いそぐらむ。

おしなめてもの和らかに白銀を
蒸す如し、目路のかぎりをつつむなる
月光に包まれ、はたや、吸ひぬれば
あはれ、わが靜心なく物思ふ
たましひの若さは胸に躍るなり。

岨路ゆく小鹿は、今宵、生れし夜の
母が乳の甘きかをりや思ふらむ。
我も亦小鹿の如く、いづかたと
知らず、はた、誰が栖むとしも知らなくに、
人の世のいのちの森の若芽なる

かをりにぞあくがれそめぬ、春の夜。

（四月十九日夕）

友藻外に

落月は、臨終の人の魂の如、
しぼみぬ、さては、ゆらゆらに木の間を下りて、
春淺き丘の小草の根に入りぬ。
このしづけさに、物ものか息もつくべき。
身の内の脈のひびきを、遠方ゆ
たづねきぬらむ友人の駒のあがきと

あざやかに我は聞くなり。この夜頃、
月入る方の君は今、何を思ふや、
うづたかき黄卷に照る燈火は、
月入れど、猶消さざるや。夢に逢はまし。

（四月二十日夜）

山杜鵑

若芽柏の木の間の
下暗たどり來ぬれば、
遠方小角（くだ）の音ぞする。

桓朽ちし古牧の
夕月てらせる草の上に
黄牛（あめうし）しづかにまろべり。

落ちてゆく月の丘邊に
牧の子ひとり走れり、
鞭のひびきをきけるや、
牛皆起ちて啼きぬ。
ふとしも木の間に聲ぞ騒げ、
山杜鵑の名告るや。

（四月二十日夜）

雪の夜

雪ふる夜半のともしび、
きえ、また、明る。——音なし。
白髪かづき垂れたる
眞素足の山の翁、
戸外に立つらむ。——戸こそ叩け、
ふと灯ぞ消えたれ。——風なり。

（十一月十七日夜）

ハコダテの歌

明治四十年五月四月、みちのくの花をあとにして岩手山下の草堂を出で、五日、潮速き津輕の瀨戸を渡りて、時は午前九時、身は悲なく函館の地を踏めり。船は陸奥丸なりき。伴ひ來りし小妹をば小なる姉が許に遣りつ。我は何がな生計のたつきを求めて、離散せる一家を再び此處にまとめ、朝夕に絶ゆるなき千古の潮音に心耳を洗ひて、新しき運命の覺音を待たばやと、ひとり漂泊の愁を藏して此北海の一角に吟杖を止めぬ。これら我が一身の事、凡て苜蓿社を營める諸友の請に依れり。臥牛の山、突兀として南天に聳立し、忘るる暇なき故郷の天と我とを隔てたる、涙多き遊子のために、いささか恨みとすべきなきにあらざれども、然れども函館は實に美しき海邊なり。船の上より望見して、綠淺き木木の間に現れたる洋風の建築物のたたずまひ、まだ見ぬ外國の港のさまの忍ばれしぞ嬉しかりしに、且暮心の響きに調べを

合す字賀の浦曲の潮騒や、また大船の汽笛は、巨人の言葉の如くして、深くも我が魂を揺がせり。友と相携へて大森の砂濱を行くに、北海の磯の香は強くして高し。砂をとつて仔細に見、心常に人生を思ふ。目に見るは、劫初より不斷の咆哮をあぐる大海原なり。耳に聽くは、千古の不平を訴へてやまざる波浪の諧音なり。生命の海を見、生命の音樂をきき、我が心覺めて眠らず、永劫の詩は恐るべきばかりの明徹を以て直ちに我が心鏡に肉薄す。さめて故郷の山川を思ひ、寢て老いたる母となつかしき妻子とを夢む。漂泊の愁は苦き涙の味を以て我を老いしめむとす。然れども今我が境遇は新たなり。新しき友と海とは、我を慰むる事多し。我が胸は今幽かながらも過ぎゆきし若き心の甦りくるを感ず。噫我遂に老いむや。小兒の心今猶我が胸にあり。この心既に有り。この心を以て、――小兒の驚嘆を以て自然と人間と我が心とを歌はむとするなり。

以下記しゆくところは、乃ち斯くして歌はむとする我が函館の歌なり。

水無月

五月十八日夜、蕗堂白鯨二君と共に、苜蓿社樓上に話し、席上題を求めて「水無月」を得、燈下筆を染めて各一詩を得たり。

砂山は長くつづきて、水無月の
日は照りかへり、砂は蒸す。
淺草（かいそう）の香はいと強く
流れぬ。あはれ、日に醉ひて
啼くなる鳥の磯雲雀、
歌はも高し。

大空に雲は浮ばず。大牧の
青の廣みの夏の草
日に臥すさまや、浪なげる
海のかなたに、白羊の
群とし見ゆる心安の
帆こそは遊べ。

ふみゆけば、蹠に砂の心地よし。
身は漂泊のただ一人、
渚に寄せて花と咲き、

くだけてかへる浪の音に
思ひぬ、遠きふるさとの
母の渚邊。

砂ひかる渡島の國の離磯や、
我は小貝を、我が母は
若布ひろふとつれ立ちし
濱茄子かをる綠叢に
朝風すなる若き日の
あはれ水無月。

年老いし彼は商人

年老いし彼は商人。
靴、鞄、帽子、革帶、
ところせまく列べる店に
坐り居て、客のくる毎、
盡日や、はた、電燈の
青く照る夜も更くるまで
てらてらに禿げし頭を
禮あつく千度下げつつ、

なれたれば、いと滑らかに
數數の世辭をならべぬ。
年老いし彼はあき人。
かちかちと生命を刻む
ボンボンの下の帳場や
簿記臺の上に低れたる
其頭、いと面白し。

その頭低るる度毎、
彼が日は短くなりつ、
年こそは重みゆきけれ。

かくて、見よ、髪の一條
落ちつ、また、二條、三條、
いつとなく拔けたり、遂に
面白し、禿げたる頭。
その頭、禿げゆくままに、
白壁の土藏の二階、
黃金の寶の山は
（日もはゆし、暗の中にも。）
積まれたり、いと堆かく。
埃及（エジプト）の昔の王は

わが墓の大金字塔（だいぴらみど）を
つくるとて、ニルの砂原、
十萬の黑兵者（くろつはもの）を
二十年（はたとせ）も役せしといふ。
年老いしこの商人（あきびと）も
近つ代の榮の王者、
幾人の小僧つかひて、
人の見ぬ土藏の中に
きづきたり、寶の山を。——
これこそはげに、目もはゆき
新世（あたらよ）の金字塔（ぴらみど）ならし、

靈魂(たましひ)の墓の標の。

（五月二十六日）

辻

老いたるも、或は、若きも、
幾十人、男女や、
東より、はたや、西より、
坂の上、坂の下より、
おのがじし、いと急(せは)しげに
此處過ぐる。

今わが立つは、
海を見る廣き巷の
四の辻。——四の角なる
家は皆いと嚴めしし。
銀行と領事の館、
新聞社、殘る一つは、
人の罪嗅ぎて行くなる
黑犬を飼へる警察。

此處過ぐる人は、見よ、皆、
空高き日をも仰がず、

船多き海も眺めず、
ただ、人の作れる路を、
人の住む家を見つつぞ、
人とこそ群れて行くなれ。
白髯の翁も、はたや、
絹傘の若き少女も、
少年も、また、靴鳴らし
煙草吹く海産商も、
丈高き紳士も、孫を
背に負へる痩せし媼も、
酒肥り、いとそりかへる

商人(あきびと)も、物乞ふ兒等も、
口笛の若き給仕も、
家持たぬ憂き人人も。

せはしげに過ぐるものかな。
廣き辻、人は多けど、
相知れる人や無からむ。
並行(なみゆ)けど、はた、相逢へど、
人は皆、そしらぬ身振、
おのがじし、おのが道をぞ、
急ぐなれ、おのもおのもに。

心なき林の木木も
相凭りて枝こそ交せ、
年毎に落ちて死ぬなる
木の葉さへ、朝風吹けば、
朝さやぎ、夕風吹けば
夕語りするなるものを、
人の世は疎らの林、
人の世は人なき砂漠。
ああ、我も、わが行くみちの
今日ひと日語る伴侶なく、

この辻を、今、かく行くと、
思ひつつ歩み移せば、
けたたまし戸の音ひびき、
右手なる新聞社より
驅け出でし男幾人、
腰の鈴高く鳴らして
驅け去りぬ、四の角より
四の路おのも、おのもに。
今五月、霽れたるひと日、
日の光曇らす、海に
牙鳴らす浪もなけれど、

急がしき人の國には
何事か起りにけらし。

（五月二十六日）

蟹に

潮滿ちくれば穴に入り、
潮落ちゆけば這ひ出でて。
ひねもす横に歩むなる
東の海の砂濱の
かしこき蟹よ、今此處を、

運命（さだめ）の浪にさらはれて、
心の龕（ずし）の燈明の
汝（なれ）が眼よりも小（ささ）やかに
滅（き）えみ明るみすなる子の、
行方も知らに、草臥れて、
辿り行くとは、知るや。知らずや。

（五月二十六日）

馬車の中

花咲かず、雨のふる日の

街をゆく馬車の中なる
年若き我は旅人。
わが泣くをとがめ給ふな。
函館の少女子達よ。
煙草吹く年寄達よ、
情ある乗合人よ。
わが泣くをとがめ給ふな。
そそけたる髪に霜おき、
皺ふかく、面痩せはてし、
貧しげの媼の君ぞ
わが側に坐りたまへる。

よく見ればさにもあらねど
その頬よ、ああ、故郷に
ただ一人居給ふ母に
いと似たり。縞目もわかず
褪せし衣(きぬ)、そもまた似たり。
袖口のきれしも似たり。
など、かく、と、そは我知らず、
見れば、ただ、涙し流る。
年若き我は旅人、
わが泣くをとがめ給ふな、
情ある乗合人よ。

戀

（五月二十六日）

板硝子つめたる窓をうつ雨の
絲ほの白く、灯はあはく、夜ぞふけてゆけ。
病心、寢がへりうてば、黝める
赭土の壁の床の間に、ああ、芍藥の
一輪よ、あでにうつむく。——すさまじき
煙の海の色に似る壁の中より
拔けいでし白斑の淡紅ぞほのに燃ゆ。——

寢らえぬ心つぶ立ちて、君をこそ思へ。

凄まじくか黑き海の人の生の
前に立つなる我が魂のつかれたる眼に
ふとうきし君は芍藥、——名も知らず、
我こそさめて夢むなれ。——ああ、花萎む
明日は來め、君も行くらむ、かくてまた、
古銅の瓶に、何の花、咲むとするらむ。

（五月二十六日）

流木

わだつみの青き鼓は
とどろけり、去年(こぞ)も今年も。
しらしらと明けゆく朝も
曇りたる夕も、恒に
かはるなきひびきをあげて、
轟轟と砕くる浪の
浪頭日も夜も白し。

白砂の長き渚は
弓のごと海を抱けり。
ちりしける枯藻のなかに
足痕も印さず。はたや、
沖をゆく帆も見る日なし。
時ありて嵐は來り、
渚邊のところどころに
砂山を築きては去る。

あはれ、その渚の上に
横たはる太き流木、

さしわたし七尺ばかり
砂山に根をうち上げて、
枝もなき長き幹をば
その半ば海に入れたり。
海鳥は時にかがなき、
その上に翼やすめぬ。

われ來り、この流木の
かたはらに、小犬のごとく
寢ころびて、青き鼓の
とどろきを直にぞ聞ける。

身じろがず、荒磯の砂の
つよき香を直にぞ吸へる
あなあはれ、覺むる期もなく。

黑き箱

ふるさとの港を出でて
七日經ぬ。水や空なる
目路の涯、ただひろびろと、
一すぢの煙だになし。
矢の如く船は走れり。

舷(ふなばた)の白き潮(しほあわ)溫
その中に浮きつ沈みつ
ただよへる黑き箱見ゆ。

その中に何か入りたる。
脣紅く黑髮長き
生首か。讀む人もなき
文字書ける尊き經か。
はた、空し虛か。知らず。
漂ひて、浮きつ沈みつ
破れざるかの黑き箱。

おそろしきかの黑き箱。

老人

ひえわたる小暗き隅に
開かざる小さき房(へや)あり。
骨立ちて眼凹みし
老人ぞ一人坐れる。

昏々と、あはれ、日も夜も
身動がず、半ば眠れり。

慵きは、朝な夕なの
濁りたる低き咳嗽。

時ありて何かつぶつぶ
呟やきつ、寒き笑ひを
頬にうかべ、かりり、かりり、と
一片の骨を嚙むなり。

あさましく、かりり、かりり、と、
あはれ、そはすでに幾年
わが胸に死にて横ふ

初戀の人の白骨。

時ありて、わななく指を
折りふせて何か數へぬ。
或時は我にそむける
友人を、また或時は。

溫き手とり別れし
なつかしき人の思出。
はた、一人のがれ出でにし
故郷の遠き路程。

時ありて、我に言ふらく、
『何かある、大空を見よ。』
われ答ふ、『何ものもなし。』
『げにさなり、虚し。』と笑ふ。

白骨

はてもなき夏草の野を、
一すぢの白き埃の
幅ひろき路ぞ、西より

東より直に横ぎる。
路のべに、あはれ立ちたる
一もとの名なき大木。
ひろげたる繁葉の枝は
さながらに青き傘。

とある年、とある夏の日、
遙かなる西の方より
辿り來し異國人の
旅の隊三百ばかり。
先達ぞ先づ杖すてて

大木の下に憩へば、
老いたるも若きも共に、
少女子は髪かきあげて、
病ある馬上の人も、
みななべてここに憩ひぬ。

くわと照れる夏の日ざかり、
ここのみは繁れる葉より
雫してたゆることなき
涼風(すずかぜ)ぞ幹をめぐれる。
さればかの旅の人々

いつとなく深く眠りぬ。

あなあはれ、あなあはれ、
旅人は今も見るらむ、
はてもなき夏草の野の
大木の下に眠れる
三百の白き骨ども。

（以上四篇、明治四十一年八月「明星」所載）

ノートより

一塊の土

『ただ一日、神よ、願はく、
ただ一日、故郷人の
眠りをば覺まし給ふな。』
かくぞ我恒に祈れり、
今日こそはわれ死になむと
かなしくも泣きぬるる日に。

神はそを許し給はず。
ただ一日我が故郷に
人知れず訪ねかへりて
心ゆく許り泣きつつ
己が家の跡なる土の
一塊(ひとくれ)を持て來むものと
それのみを我は願へど。

山頂

被ぎたる衣の色も
面帕(おもぎぬ)も、はた、手套も
一様の黒き天鵞絨。
衣摺の音だにもせず、
つと二人、暗より出でて
その一人丈の高きは
我が頭、丈の低きは
我が足を、諸手に持ちて
運びける、夜の路をば。

黒きもの蔽はれたれば

何ものも見むよすがなし。
寒からず、はた暑からぬ
夜の路いといと長し。
既にして我は聞きにき
ほど近き鶏(くだかけ)の聲。
やがて又時經て聞きぬ
やや遠き鶏(くだかけ)の聲。

三度目に鶏(くだかけ)の聲
いと遠く鳴くを聞く時、
我はつと地(つち)に置かれき。

その二人何かひそ〳〵
聞き知らぬ言葉に語り、
やがて我が覆布(おほひ)をとりぬ。

そは、とある山の頂、
しら〳〵と明けゆく空に
二つ三つ星は殘れり。
遙かなる麓の方に
あはれ我が故郷見えぬ。——
寺の屋根、沼の薄靄、
村長(むらをさ)の家の白壁

はたやかの黑き林を
銀の絲に縫ひたる
川面も、廣き田の面も。

いざ見よと其時二人
とりすてぬ黑き面帕(おもぎぬ)、——
そはあはれ老いし父母——
よく見よと再びいへる
父の眼は何か怒れり
母の眼は深くうるめり。

夢さめて我は泣きにき。

あてもなく今日を迎へて
あてもなく明日またゆかむ
かなしくも衣やぶれし
うら若き流離の身ゆゑ。

森の中

路はふと森に入れりき。
兩側の高き老樹は
うち繁る枝さしかはし、
いく哩(まいる)、綠の屋根に

密(ひそ)々と路を蔽へり。

濕らへる苔を踏みつつ、
往來する人にも逢はず、
黃泉路ゆく心地に行けば、
わが咳ぞ森に響きて
ひそ〳〵と木魂おこれり。
ゆき〳〵て路は曲りき。
大いなる白き獸
我が前に路を塞ぎて
うづくまり動くともせず。

と見て我が足はとまりぬ、
俄かにも胸ぞさわげり。
そは、あはれ、綠の屋根の
隙洩れて地を染めたる
日の光。いとも眩ゆく
目を射りてほのにゆるぎぬ。
我はそを避けて通りつ
すでにして森を出でにき。

冬の夜

音もなく雪ふりつもる冬の夜の
林の中の一つ家に、老いたる汝(なれ)の
ただ一人ありとし思へ。

その時に煖爐(ストーブ)の火ははつ〳〵と
音して燃えつ、しかすがに背(そびら)にせまる
寒さをば誰か防がむ。

重げにも垂れたる窓掛(カーテン)の
後にはその窓硝子寒さに慄へ
戰きて青く噤まむ。

その時に汝は雪に枝折るる
音をききつつ燈火の心をかきたて
ストーブに薪やますらむ。

幽思

ほのかにも搖げる灯あり。
ほのかにも今我が心、
はるかなる人無き島の

洞内(ほらぬち)の光明(あかり)を忍ぶ。
ほのかにも搖げる灯あり。
ほのかにも今我が心、
春の夜遠方人の
涙にし濡れたる思ひ。
我が思ひ、幽かに顫ふ。

（明治四十一年三月十七日「釧路新聞」所載）

心の姿の研究

夏の街の恐怖

燒けつくやうな夏の日の下に
おびえてぎらつく軌條の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて、
肥つた三歳ばかりの男の兒が
ちよこちよこと電車線路へ歩いて行く。

八百屋の店には萎えた野菜。
病院の窓の窓掛は垂れて動かず。
閉された幼稚園の鐵の門の下には
耳の長い白犬が寢そべり、
すべて、限りもない明るさの中に
どこともなく、芥子の花が死落ち、
生木の棺に裂罅の入る夏の空氣のなやましさ。

病身の氷屋の女房が岡持を持ち、
骨折れた蝙蝠傘をさしかけて門を出れば、
横町の下宿から出て進み來る、

夏の恐怖に物も言はぬ脚氣患者の葬りの列。
それを見て辻の巡査は出かかつた欠伸嚙みしめ、
白犬は思ふさまのびをして、
塵溜の蔭に行く。

焼けつくやうな夏の日の下に、
おびえてぎらつく軌條(レール)の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて、
肥つた三歳ばかりの男の兒が
ちよこちよこと電車線路へ歩いて行く。

起きるな

西日をうけて熱くなつた
埃だらけの窓の硝子よりも
まだ味氣ない生命がある。

正體もなく考へに疲れきつて、
汗を流し、いびきをかいて晝寢してゐる
まだ若い男の口からは黄色い齒が見え、
硝子越しの夏の日が毛脛を照し、

その上に蚤が這ひあがる。

起きるな、起きるな、日の暮れるまで。
そなたの一生に涼しい靜かな夕ぐれの來るまで、
何處かで艶いた女の笑ひ聲。

事ありげな春の夕暮

遠い國には戰があり……
海には難破船の上の酒宴……

遠い國には澤山の人が死に……
また政廳に押寄せる女壯士のさけび聲……
海には信夫翁（あはうどり）の疫病……
あ、大工の家では洋燈（ランプ）が落ち、
大工の妻が跳び上る。

柳の葉

電車の窓から入つて來て、
膝にとまつた柳の葉——

質屋の店には蒼ざめた女が立ち、
燈光にそむいてはなをかむ。
其處を出て來れば、路次の口に
情夫の背を打つ背低い女——
うす暗がりに財布を出す。

何か事ありげな——
春の夕暮の町を壓する
重く淀んだ空氣の不安。
仕事の手につかぬ一日が暮れて、
何に疲れたとも知れぬ疲れがある。

此處にも凋落がある。
然り。この女も
定まつた路を歩いて來たのだ——

旅鞄を膝に載せて、
やつれた、悲しげな、しかし艶かしい、
居睡を初める隣席の女、
お前はこれから何處へ行く?

拳

おのれより富める友に慾(あはれ)まれて、
或はおのれより強い友に嘲られて、
くわつと怒つて拳を振上げた時、
怒らない心が、
罪人のやうにおとなしく、
その怒つた心の片隅に
目をパチパチして蹲つてゐるのを見附けた——
たよりなさ。

あゝ、そのたよりなさ。
やり場にこまる拳をもて、
お前は
誰を打つか。
友をか、おのれをか、
それとも又罪のない傍らの柱をか。

心の姿の研究補遺

無題

秋の夕べの重くるしさ
柳の枝は一條々々に
限りなき重たさを以て、
冷い鐵の欄干（てすり）に口づけ、
椅子による男の膝には、
涙にぬれた女の顔——

空をとぶ鳥の羽音を
小蒸汽の汽笛がかきみだし、
遠くで鐵板を叩く音。
小兒は空氣の重さに泣き出し、
大川の水の逆さに流れる時。

室の中には青白い瓦斯（ガス）の光が
卓（テーブル）の上の紅薔薇を黑く見せ、
振子の動かぬ時計の中に、
人生の階段を下る重い〳〵

「時」の獣の忍びやかな足音が潜む。

秋の夕べの重くるしさ。
女工は給料を前借して家路を急ぎ、
厩には馬が病む。
別ればなしが女を泣かせ、
男は手足のやり場にこまる。

騎馬巡査

絶間なく動いてゐる須田町の人込の中に、

絶間なく目を配つて、立つてゐる騎馬の巡査、
見すぼらしい銅像のやうな——。

白痴の小僧は馬の腹をすばしこく潜りぬけ、
荷を積み重ねた赤い自動車が
馬の鼻先を行く。

數ある往來の中には、
子供の手を曳いた巡査の妻もあり
實家へ金借りに行つた歸途、
ふと彼の馬上の人を見上げて、

おのが夫の勤務を思ふ。

無題

屋根又屋根、眼界のとどく限りを
すき間もなく埋めた屋根！
圓い屋根、高い屋根、おしつぶされたやうな屋根、
おしつぶされつして、或ものは地にしがみつき、
或は空にぬけ出ようとしてゐる屋根！
その上に忠實な教師の目のやうに、
秋の光がほか〳〵と照りわたつてゐる。

とらへようもない。
然し乍ら、魂の礎石までゆるがすやうな
ああ、あの都會のとどろき……
初めてこの都會に來て此景色を眺め
この物音をきいた時、
弱い田舍者の心はおびえた——
廣さ、にではない、高さ、にではない、又、
其處にいとなまるる文明の尊さにでもない、
あのはかりがたい物音の底の底の——
都會の夜のふかさに。

今また此處に來て此景色を眺め
そしてこの物音をきいて、
よわい新らしい都會の歸化人の心はおびえる——
獅子かひが獅子の眠りに見入つた時の心も、——
おのれはとらへがたき物音の底の底の、——
入れども〳〵はかりがたき
都會の夜のふかさに。
すべての生徒の慾望をひとしなみにみる
忠實なる我が教師よ、
そなたはそなたの慾望と生徒の慾望を

またひとしなみに見るか。

花は精液の香をはなちて散り、
人は精力の汗を流して死ぬ。
それらは花と人との慾望のすみてか。
教師よ、そなたの愛は、——
雨とふり日とそそぐそなたの愛は、
人の……

見よ、數へきれぬ煙突！
その下には死なうとする努力と死ぬまいとする慾望と……

ああの騒然たる物音
人間は住居の上に屋根を作つて、
その上に日が照る。
屋根は人間の最上の智恵!!
そして又反抗、又運命、その上に日が照る。

あゝ、我は歸らうか？　はた歸るまいか？
あの屋根！　眼界のとどく限りを
すき間もなく埋める屋根の下へ。

無題

一

赤！　赤！
赤といふ色のあるために
どれだけこの世が賑やかだらう。

二

花、女、旗、

それから、血！
砂漠に落つる日
海に漂ふ戰さの跡の波。

三

『ああこんなに悲しい事がまたとあらうか！』
何もせずにぼんやりしてゐた時
ふとこんな事を言つてみた。
强い言葉で。
そして記憶の中の悲しい心地を
よび起して見ようとした。

欠伸！
ややあつてまた『死なうか。』と
思つてみた。『死ぬ外に途がない。』と。

四

靜けさ！
心々の隅々谷々には
何の反響もない。
何か聞えさうなものだと

耳をすまして
心の狀を窺つてゐると、ふと
あの女のことが浮ぶ。
『行かう、さうだ。』と直ぐ身仕度をした。
『嘘のつきあひをしに。』

五

物を言へといふのか？
笑へといふのか？
よし、よし、俺は知つてゐる——

戀は媚のとりやりだ。
悲しい女！

少し、待つてくれ、少し。
ほんと少しの間。
今一寸、一寸笑へなくなつた。
俺には惡いくせがある。

詩集　呼子と口笛（終）

7267

昭和二十二年八月廿五日印刷
昭和二十二年八月三十日發行

呼子と口笛（よびこ と くちぶえ）
定價 貳拾五圓

著作者 石川啄木（いしかわ たくぼく）
發行者 高須廣治
企画者 大倉信昌
校正者 原政雄
印刷者 鞍智雄章

開明堂製本

印刷所 濱松市上池川町 株式會社 開明堂
發行所 豐橋市吳服町 高須書房
會員番號A二二〇〇三〇

配給元 日本出版配給株式會社

911.56
I76
5

28. 3. 19

終